

## プルーストと音

武 藤 剛 史

二十世紀小説の最高峰とされる『失われた時を求めて』の作者マルセル・プルーストは、あらゆる感覚に敏感であった。そもそも、意志や知性によって、あるいは習慣や利害意識によって、汚染され、曇らされる以前の真の感覚、真の印象をありのままに感受することが、真の現実、真実の生を生きることを意味する、というのが彼の変わらぬ芸術的信念であった。彼の言う特権的瞬間とは、そうした真の感覚、真の印象が意識に現われる瞬間のことであり、その典型が無意志的記憶の現象である。無意志的記憶の代表例は、作品冒頭の「プチット・マドレーヌ」の挿話であり、そこでは味と香り、つまり味覚と嗅覚が真の現実、真実の生を蘇らせることになるが、真の現実、真実の生に結びつき得る感覚は味覚や嗅覚に限らない。触覚や体感もそうであり得るし、音も例外ではない。

本稿では、彼の作品の中で、音という感覚がどう捉えられているか、またどう描かれているかを、いくつかの例を取り上げて見ていくことにしたい。それによって、彼の作品の重要な側面、本質的要素の一端が浮かび上がってくることを期待したい。

## (1)

語り手「主人公」「私」の幼年時代。コンブレの田舎に滞在するときの最大の悩みは、夜、二階の自分の部屋でひとりさびしく寝ることであった。母のお休みのキスを受けることで、その悲しみによく耐えるのだったが、お客が来る晩は、それも叶わない。「私」は、お客が帰って、母が二階に上がって来るのを待伏せしようと決心する。ここでは、夜の静寂の中を響いて来る音が「音楽のピアノニッシモの効果」というふうに巧みに表現され、それが月の光に照らされた夜景と重なって、静まり返った夜独特の雰囲気醸し出している。

私は音を立てずに窓を開けた。そして私のベッドの脚もとにすわった。私は下に聞こえないように、そのまま身動きしないでいた。そこでは、物みなが、それらもまた、月光を乱すまいとして、無言の注意のなかに身を凝らしているように見えた。その月光は、ひとつひとつの物の前面に、その物自体よりも濃くて具体的にその光の反映の幅をひろげて、物を二重にしたり、後退させたりしながら、いままでたたまれていた地図をひろげたように、風景を平べったくするとともに、拡大していた。どうしても動かないではいられないもの、マロニエの葉むらなどが、動いていた。しかし、その細かくて、全体にわたる葉むらのそよぎは、濃やかなニュアンスをおび、繊細をきわめていて、身じろぎしないほかのものにひろがったり溶け合ったりすることなく、そこだけにとどまっている。物音ひとつ吸い取らないこの静寂にさらされると、どんな遠い物音も、町はずれの公園から来るにちがいない物音でも、くつきり「仕上げ」られ、細部まで聞き取れるから、そのような遠方の物音が、まさに音楽のピアノニッシモの効果と思われるほどである。たとえば、コンセルヴァトワールのオーケストラで、じつにみごとに演奏される弱音器つきの管弦楽のモチーフが、音符のひとつも聴きのがすまいと近くで傾聴しているのに、コンサート・ホールから遠く離れたところで聞こえているように思われる場合と似ている。（「スワン家のほうへ」）

## (2)

コンブレーの日曜日。昼食で満腹した「私」は、自分の部屋に戻って、一休みする。鎧戸を閉めて薄暗い部屋の中にいる「私」に、そこから様々な音が響いてくるが、それらの音は、「私」の想像力に強く訴え、その光に溢れた夏の光景を、その場にいる場合以上に、鮮やかに喚起する。

私はすでに本を手にして自分の部屋でベッドに寝ころんでいたが、その部屋は、透き通ってはかなく消えそうな内部の涼しさを、ほとんど締めきった鎧戸のその午後の太陽から、震えながら守っていた。その鎧戸のところでは、それでも日差しの反映が、その黄色い翼をなかに入れる道をやっと思つて、鎧戸の棧と窓ガラスのあいだの片すみに、まるで羽を休めている蝶のように、じっと止まっていた。室内は本を読むのにやっと思えるさで、そのまばゆい光の感覚は、ラ・キュール通りでカミュが埃だらけの箱を叩く音からしか私に伝えられなかった（カミュはフランソワーズから、私の叔母が「お休みしてない」ので、音を立ててもよいことを知らされていた）。しかもその音は、暑い日に特有のよく反響する空気に跳ね返りながら、真つ赤な火花の星屑を遠方まで飛び散らせているようだった。戸外のそうした光の感覚は、私の目のまえで、小さな楽団を組み、夏の室内楽のようなものを演奏している蠅たちによつて伝えられることもあった。この蠅の音楽は、人間が歌う音楽の一章——よい季節に偶然聞いたのが、つぎに聞くとその季節を思い出させる——のように光の感覚を呼び起こすのではなく、もつと必然的な絆で夏に結びついていて、快晴の日々から生まれ、そうした日々とともにしかふたたび生まれることはなく、そんな日々の本質の少量を含んでいるのであって、われわれの記憶に単に夏の映像を呼び覚ますだけではなく、夏が帰ってきたことを、夏がじつさいに目のまえにあって、あたりを取り巻き、直接に近づきうることを保証するものなのである。

そんな私の部屋のほの暗い涼しさと、そとの通りの日向とは、影と光の関係をなしていた。つまり、部屋は、通りと一体となって光に包まれ、私の想像力に夏の総体的な光景を提供していたのであって、私が散歩に出ていたとすれば、私の感覚は断片的にしか夏の光景を楽しめなかっただろう。そのようにして、私の部屋のほの暗い涼しさとうまく調和した私の休息は（読んでいる書物によって語られ、私の休息をゆさぶりにやってくる物語の波瀾のおかげで）、流れる水のなかにおいてじっと動かさずにいる手の休息のように、そとにみなぎる生気の奔流の衝撃と躍動とに耐えるのであった。

（「スワン家のほうへ」）

### （3）

やはりコンブレ。レオニー叔母は、自分を病気だと思い込み、自室に籠ったまま、まったく外に出ようとしない。しかし、好奇心だけは旺盛で、自室の窓から通りを眺めては、あれこれ町の噂話をするのが好きで、それが唯一の気晴らしだった。

ここでは、雨が降り始める様子が描かれているが、最初から「雨が降ってきた」というのではなく、まずは何か分らない物音として描かれている。このように、「ひとつの物を表現するのに、最初にひらめいた錯覚がそれを別の物と取り違えた、その別の物をもってするほうが」われわれが受けた印象の真のリアリティを表現することになると作者は言う。

「あら、もう三時？」急に叔母は顔色を変えて声をあげるのであった。「それじゃ晩祷が始まるわ。私のペプシンをうつかりしていた！これで分かったわ、どうしてヴィシー水が胃にもたれていたか」

そう言って叔母は、紫のビロードの布装で、金の留め金がついたミサ書にとびつき、あわてたので、祝祭日の

ページの目じるしに挟んであった、黄ばんだ紙レースのテープで縁取りした何枚かの絵を取り落とし、ペプシン消化液を飲み下しながら、聖典の文句を大急ぎで読み始めたが、ヴィシー水からそんなに長く経ってペプシンを飲んだので、消化液がいまからあとを追っかけてうまく鉱泉水を落ち着かせることができるかどうかよく分からない不安から、叔母には聖句をうすばんやりとしか理解できないのであった。「もう三時、信じられないわねえ、時間が経つのは！」

何かが当たったように、窓ガラスに小さな音がひとつ、続いて上の窓からひとつが砂粒を撒いたかのように、ゆたかな量感の、さらさらした落下、ついでその落下はひろがり、そろって、ひとつのリズムを運び、流れとなり、響きとなり、音楽となり、無数にひろがり、くまなく四方に満ちた。雨が降ってきたのだ。

（「スワン家のほうへ」）

（4）

すでに「私」は青年になっている。バルベックで知り合ったアルベールヌを愛するようになり、やがて嫉妬心から、無理やりパリに連れ帰り、彼女を「囚われの女」とする。つまり、自宅にいっしょに住まわせ、彼女を監視下に置くのである。だがそうすると、今度は、彼女を愛する気持ちが薄れ、むしろ彼女がうつとうしくなり、彼女を監視し、監禁していることを煩わしく思う。「私」自身も、ほとんど外に出ることもなく、自宅に籠ったまま、無為の日々を送る。そんな中で、そこから響いてくる物音だけが「私」に気晴らしや解放感、さらには生きる喜びをもたらしてくれる。

朝になると、顔はまだ壁に向けたまま、窓の厚いカーテンの上部に差し込む光線の具合を見届けないまえか

ら、どんな天気か、私には分かっていて。表通りの最初の物音がそれを教えてくれるのであった。湿気が多ければ、物音は、鈍く、ゆがんで伝わってくるし、晴れ渡って冷たく澄んだ朝は、さえぎるものがないよく響く空間を、物音は矢のように震えながら伝わってくる。そんなわけで、一番電車のすべり出しの音から、それが雨にかじかんでいるのか、それとも青空に向かって飛び立っていくのかを、聞き分けてしまうのだった。もしかすると、それらの物音を追い越して、何かもつとすばやく、もつと浸透性に富んだ発散物がさきに届いているのかもしなかった。そうした発散物は、私の睡眠に浸みこんできて、そこに雪を予知する陰鬱な気分を広げることもあるし、あるいはまた、私のなかに間歇的に蘇るひとりの小人に、つぎつぎに太陽の讃歌を歌わせ、それが、まだ眠つていながらも微笑み始め、閉ざされたまぶたをまぶしそうに開こうとしている私に、音楽に包まれたうっとりするような目覚めをもたらしてくれることもあった。

〔囚われの女〕

## (5)

やはり、パリのゲルマント邸の一画にあるアパルトマンの自室で、まだベッドの中にいる「私」に、そとの通りからいろんな物売りの声が聞こえてくる。

〔その翌日〕私は朝早く目を覚ました。そして、まだ半睡の私に湧きおこった歓喜で、私は冬のなかに挿入された春の一日があることを知った。そとでは、瀬戸物接ぎのホルンや椅子直しのトランペットをはじめとして、晴れた日にはシチリアの牧人とも見える山羊飼いのフルートにいたるまで、さまざまな楽器のためにうまく作曲された民謡の諸テーマが、朝の空気を軽やかにオーケストレーションして、一種の「祝祭日のための序曲」を奏でていた。聴覚、この快い感覚は、街の仲間をわれわれの籠っているところに連れてくる。つまり、その街のす

べての道筋をわれわれに跡づけ、そこを通り過ぎるすべての物の形を描き、その色をわれわれに見せてくれるのである。

〔囚われの女〕

## (6)

最終編「見出された時」。さまざまな失望・挫折を味わい、健康も損なった「私」は、文学者になるという望みもすっかり失っている。そもそも、文学の現実性・真実性それ自体が信じられなくなっていたのだ。

それは、いまでも思い出すが、野原のまんなかに汽車が臨時停車したときだった。鉄道線路に沿った一列の木々を、夕日がその幹のなかばまで照らしていた。「木々よ」と私はつぶやいた。「きみたちがぼくに言うべきことはもう何もないし、ぼくの心も冷え切って、もうきみたちの言うことが耳に入らない。ぼくはそれでもいまこうして自然のまんなかにいる。だがぼくの目は、きみたちの光った頂きと陰った幹とを区切っている線を、冷淡に退屈して見届けるだけだ。これまで自分を詩人だと思ひ込むこともあったとしても、いまはそうではないのを知っている。これからぼくのまえに開かれようとしているかくも無味乾燥な生活の新たな日々において、もはや自然が伝えてはくれない靈感を、今度は人間たちがぼくに吹きこんでくれるかもしれない。だが、ぼくが自然を歌うことができたかもしれないあの年月は、けっして帰らないだろう」とはいえ、自然の靈感が不可能になった代償として、人間観察が可能になるだろうという、そんななぐさめを自分に与えようとするのは、単なる気休めにすぎないことが分かっていたし、自分の無価値を自覚している証拠であることが私にも分かっていた。私がほんとうに芸術家の魂を持っているならば、落日に照らされたこの並木をまえにして、また汽車の車室のステップにまで背伸びしている堤のこの雑草の可憐な花々をまえにして、どうして私が快感を覚えないことがあるのか？

その花卉を私は数えることができるほどののに、多くの優れた文学者がやるように、その色あいを述べる事が、私にはどうしてもできないのだ。そもそも、自分の身に感じられなかった快感を、どうして読者に伝える気になれよう？

その後「私」は、久しぶりにゲルマント大公邸で開かれるマチネ（昼の宴会）に出向く。大公の中庭を歩いていると、不意に車が接近してきて、「私」は不揃いな敷石に躓いてよろめく。すると突然、「私のすべての失望は幸福感のまえに消え失せた」。それと同時に、まばゆい光の印象が蘇った。それはヴェニススの映像だった。不揃いな敷石に躓いた感覚が、かつてサン・マルコ聖堂の洗礼室の不揃いなタイルに躓いた感覚とつながり、その感覚と結びついたヴェニススの映像がありありと蘇ったのだ。さらにまた、大公の館に入るとすぐに、二度目の無意志的記憶の現象が起きる。

ところで、まさしくこのとき、第二の前触れがやってきて、不揃いなふたつの敷石が与えてくれた前触れを補強し、なお根気強く努力するように私を励ました。ちょうどひとりの召使いが部屋に来ていて、音を立てないよう一心に努めた甲斐もなく、スプーンを皿にかちんと当てたところだった。不揃いなタイルが私に与えた幸福感と同種の幸福感が私に押し寄せた。今度のも、やはり昼の暑気の感覚であったが、まったく違った感覚だった。その暑気は、煙の匂いをまじえ、取り囲む森のひんやりした匂いに和らげられている。そのとき私は認めた、そのように私に快く思われるもの、それは眺めるのも描くのもやりきれないと思った一列の木々と同じものであることを。するとたちまち私は、一種の眩暈にとらえられ、汽車の客室のなかに持ち込んだビールの栓を抜きながら、自分はその一列の木々に向かい合っている、と一瞬そう思ってしまった。それほどにも、皿に当たったス



ブーの立てたあまりにもそっくりな音が、われに返るいとまもなく、あの小さな木立のまえで汽車が止まっていたあいだに車輪のどこかを直していた鉄道員のハンマーの音の幻覚を私に与えたのであった。そのときから、この日、私を失望から引き出し、私に文学への信頼を取り戻してくれた表徴 (signe) が、さながら懸命に自己増殖していくように思われた。

(見出された時)

(7)

無意志的記憶の啓示を受けた「私」は、文学の現実性・真実性に対する信頼を回復し、今度こそ作品創造に着手しようとして決意する。しかも、永遠の現実を発見したことが、逆説的に、「時の概念」の発見にもつながったのだ。幼い頃に耳にした音が、いまでもそっくりそのまま自分の内部で響き続けていることに、「私」は、永遠の現実と「時」の広大な拡がりとを同時に認めたのである。

ところで、印象の記憶による再創造こそ、つまりはその記憶をさらに掘り下げ、明るみに出し、知性の等価物に転換しなくてはならないということこそ、さきほど図書館のなかで私が考えついた芸術作品の条件のひとつ、ほとんどエッセンスそのものではなかったか？ ああ！ せめてまだ私に、体力、記憶力があつたなら！ さっきの図書館で『フランソワ・ル・シャンピ』を目にとめたときに私に思い浮かんだ昔のあの晩には、そうした力がまだそっくりそのまま壊れずにあつた。そうだ、母が私への理想を放棄したあの晩からだつた、私の祖母の緩慢な死とともに、私の意志と健康の衰退がはじまったのは。すべてはあのときに決定されていたのだ。母の顔の上に唇を置くのに、明日まで待つことができなくなり、意を決し、ベッドから飛び降りて、寝間着のままで、私は窓際に立ちに行き、スワン氏が帰っていく物音がするまで、そこにじっとしていた。その窓からは、ずっと月

の光が差しこんでいた。家の人たちが彼を送り出しに行つた。裏庭の門が開き、小鈴が鳴り、また閉まるのが聞こえた……

すっかり消え失せた時の概念、過ぎ去つてもなおわれわれから切り離されない年月のあの概念を、いまかくも強く浮き彫りにしようと私が意図したとすれば、それはあたかもこの瞬間に、ゲルマント大公のこの館のなかで、過ぎ去つた歲月のあの音を、いまた私が聞いているからだつた。スワン氏を送っていく家の人たちのあの足音を、とうとうスワン氏が帰つて行き、ママが上がつてくることを私に告げる小鈴の、はねかえる、鉄の響きをした、とめどもない、かん高い、冷たい、あの響きを、いまた私が聞いているからだつた。しかもそれら自身は、過去のなかにあのように遠くに位置しているのだつた。このとき私は、昔コンブレでそれらを聞いた瞬間と、ゲルマントの午後のこのパーティーとのあいだに、当然ながらそれぞれの位置を占めているすべての出来事のことを考えると同時に、いまもまた私のなかに鳴っているのは、たしかにあの小鈴であることを考えて、驚き恐れた。しかも私には、あの鈴のかん高い音を何ひとつ変えることができないのであつた。そのうえ、あのかん高い音がいままでどうして私から消え失せていたかがよく思い出せないで、それをもう一度聞き直して、はつきりと聞き取るために、私は仮面をつけた人びとがまわりでがやがややっている会話の雑音を聞かないように努めなければならなかつた。その鈴の音をもっと身近に聞こうとするには、私は私自身のなかにふたたび降りていかねばならないのだつた。つまりその響きは、つねに私自身のなかにあつたのであり、またその響きと現在のあいだには、あの無限に流れ去つたあの過去のすべてがあつたのだが、私はそれを自分のうちに持ち運んでいることを知らなかつたのである。昔あの小鈴が鳴つたとき、私はすでに存在していたのであり、それから長い時を経て、またしても私がその響きを聞いたというのは、そこに断絶がなかつたということであり、私がひととき

も存在すること、考えること、自分を意識することを止めなかった、ということであつたはずである。なぜなら、あの昔の瞬間は、いまもなお私に結びついていて、私のなかにより深く降りていくだけで、私はいまなおその瞬間に立ち返ることができるのだから。

かくも長いこのすべての時は、ただ単に、ひとつの中断もなしに、私によつて生きられ、考えられ、分泌されたものであり、私の生涯であり、私自身であつただけではないということ、そのうえにまた、私はたえずその時を自分に引き連れていなくてはならず、目もくらむ高いその時の頂きに、鳥が止まるようにして、自分がその時に支えられており、その時の位置を動かさなければ自分は動くこともできない、ということ、私は感じて、疲労と恐怖の念を覚えるのだった。コンブレーの裏庭の小鈴の音を聞いた日付は、あのように隔たりながら、しかも自分の内部にあり、自分が持っているとは知らなかったあの巨大な次元のひとつの指標となっていたのだ。私は自分のはるか下に、といっても私のなかに、あたかも千尋の谷を見下ろすように、多くの年月を望見して、眩暈を覚えた。

（「見出された時」）